はじめに

本テキストは、皆さんが無理なく基本をマスターし、かつ応用力を養成できるように編集してあります。

単元ごとに、知識を定着させるための例題と「解法と学習の手引き」があり、さらに問題を解く力を確実にするために、演習問題Aと演習問題Bが段階を追って配列してあります。

古典は知識の積み重ねが不可欠な教科です。本テキストの学習を通じ、正解へのプロセスを体得し、実力を確かなものとされることを願っています。

構成と活用法

本テキストは、次のように構成されています。

▼**例　題**　各講で基本的な問題を出題しています。

▼**解法と学習の手引き**　例題の単語や語法についてヒントを示しています。わからない問題がでたときに役立ててください。

▼**演習問題A**　基礎力の再確認を目的としています。解けた場合も、そうでない場合も、正解に至るまでの過程を必ず確認しましょう。

▼**演習問題B**　応用力の養成を目的としています。例題・演習問題Aで学んだ文法・用語をどのように活用していけばよいかを考えながら、問題に向かうと効果的です。

もくじ――大学受験α　古典

1　物語……2
2　説話……10
3　日記……18
4　歴史物語……26
プラスα　助動詞用法チェック……34
付録―文語文法要覧……36

Sample

例題

次の文章は「大和物語」の百五十五段（山の井の水）である。よく読んで、後の設問に答えよ。

むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうたりけるを、帝に奉らむとてかしづきたまひけるを、殿に近う仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。顔かたち、いとうつくしげなるを見て、よろづのことおぼえず、心にかかりて、夜昼いとわびしく、病になりておぼえければ、「せちに聞こえさすべきことなむある」といひわたりければ、「あやし。なにごとぞ」といひていでたりけるを、さる心まうけして、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃げていにけり。安積の郡、安積山といふ所に庵をつくりて、この女をすゑて、里に出て物などはもとめて来つつ食はせて、年月を経てありへけり。この男いぬれば、ただひとり物も食はで山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。かかるほどにはらみにけり。この男、物もとめにいでにけるままに、三四日来ざりければ、待ちわびて立ちいでて、山の井にいきて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりにけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らでありけるに、にはかに見れば、いとおそろしげなりけるを、いとはづかしと思ひけり。さてよみたりける、

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

とよみて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。男、物などもとめてもて来て、死にてふせりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見てかへり来て、これを思ひ死にに、かたはらにふせりて死にけり。世の古ごとになむありける。

問一 傍線部①～⑥のそれぞれの主語として最も適切なものを、次のア～エの中から一つずつ選び、記号で答えよ。

ア むすめ　イ 大納言　ウ 帝　エ 内舎人

①〔　　〕②〔　　〕③〔　　〕④〔　　〕⑤〔　　〕⑥〔　　〕

問二 右の文中の「あさか山……」の歌について、次の各問いに答えよ。

(1) 歌を作ったのは誰か。文中の語で答えよ。〔　　〕

(2) この歌の修辞法の部分に傍線を付し、技巧の種類を指摘して具体的に説明せよ。〔　　〕

出典

「大和物語」

平安時代、十世紀中頃の成立。「伊勢物語」に続く歌物語。他の歌物語と違い、各章段ごとに主人公が設定されている。

重要古語

◇内舎人＝中務省に属する五位以上の子弟。延喜以後は摂政関白に随身として従事した。ここは大納言の随身。

◇安積の郡＝現在の福島県郡山市周辺。

◇あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは＝安積山の姿までも映って見える山の泉は山の名のとおり浅いのであろうか。その浅い山の泉のように浅い心であなたを思っているのであろうか、いや、そんなことはない

Sample

問三　傍線部a～eの終止形と（bはひらがなで書くこと）、活用の種類を書け。

a（　　）　b（　　）　c（　　）
d（　　）　e（　　）

解法と学習の手引き

太字部分の語句や語法の解説をヒントに例題の問題を考えてみよう。

むかし、大納言の、むすめいとうつくしうてもちたまうたりけるを、帝に奉らむとてかしづきたまひけるを、殿に近う仕うまつりける内舎人にてありける人、いかでか見けむ、このむすめを見てけり。顔かたち、いとうつくしげなるを見て、よろづのことおぼえず、心にかかりて、夜昼いとわびしく、病になりておぼえければ、「せちに聞こえさすべきことなむある」といひわたりければ、「あやし。なにごとぞ」といひていでたりけるを、さる心まうけして、ゆくりもなくかき抱きて、馬に乗せて、陸奥の国へ、夜ともいはず、昼ともいはず、逃げていにけり。安積の郡、安積山といふ所に庵をつくりて、この女をすゑて、里に出て物など（食料）はもとめて来つつ食はせて、年月を経てありへけり。この男いぬれば、ただひとり物も食はで山中にゐたれば、かぎりなくわびしかりけり。かかるほどにはらみにけり。この男、物もとめにいでにけるままに、三四日来ざりければ、待ちわびて立ちいでて、山の井にいきて影を見れば、わがありしかたちにもあらず、あやしきやうになりにけり。鏡もなければ、顔のなりたらむやうも知らでありけるに、にはかに見れば、いとおそろしげなりけるを、いとはづかしと思ひけり。さてよみたりける、

あさか山影さへ見ゆる山の井のあさくは人を思ふものかは

とよみて、木に書きつけて、庵に来て死にけり。男、物などもとめてもて来て、死にてふせりければ、いとあさましと思ひけり。山の井なりける歌を見てかへり来て、これを思ひ死にに、かたはらにふせりて死にけり。世の古ごとになむありける。

（世の中に伝わる古い話である。）

ヒント

問一　敬語に注目して、文脈を丁寧にたどる。
問二　(1)後半は内舎人とむすめのやりとり。
　　(2)「あさく」の部分がポイント。
問三　動詞の終止形はウ段となる。

sample

演習問題A

次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

（かぐや姫は、とりわけ熱心に求婚する五人の貴公子たちに対し、それぞれに難題を課した。石作の皇子には「仏の御石の鉢」を要求した。それは西域にある仏の鉢で、光を発するものであった。）

翁、「難きことどもにこそあなれ。この国に在る物にもあらず。①かく難きことをば、いかに申さむ」といふ。かぐや姫、「なにか難からむ」といへば、翁、「とまれかくまれ、①申さむ」とて、いでて、「かくなむ。②聞こゆるやうに見せたまへ」といへば、皇子たち・上達部聞きて、「おいらかに、『あたりよりだにな歩きそ』とやは③のたまはぬ」といひて、倦んじて、皆帰りぬ。

なほ、a この女見では世にあるまじき心地のしければ、「天竺に在る物も持て来ぬものかは」と思ひめぐらして、石作の皇子は、心のしたくある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千万里のほど行きたりとも、いかでか取るべきと思ひて、かぐや姫のもとには、「今日なむ、天竺に石の鉢取りに④まかる」と聞かせて、三年ばかり、大和の国十市の郡にある山寺に賓頭盧の前なる鉢の、ひた黒に墨つきたるを取りて、錦の袋に入れて、作り花の枝につけて、かぐや姫の家に持て来て、見せければ、かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげてみれば、

b 海山の道に心をつくしはてないしのはちの涙ながれき

かぐや姫、光やあると見るに、蛍ばかりの光だになし。

c 置く露の光をだにもやどさまし小倉の山にて何もとめけむ

とて、返しいだす。鉢を門に捨てて、この歌の返しをす。

d 白山にあへば光の失するかとはちを捨てても頼まるるかな

とよみて、入れたり。かぐや姫、返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひかかづらひて帰りぬ。かの鉢を捨てて、またいひけるよりぞ、面なきことをば、「［　　］」とはいひける。

（注）○賓頭盧＝釈迦の弟子の一人で、一般にその像の頭や体などを撫でさすり病気の回復などを祈る。

問一　傍線部①～④の敬語は、それぞれ誰が誰に対して敬意を表しているのか。最も適切なものを次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア　作者が石作の皇子に　　イ　翁が皇子たち・上達部に　　ウ　皇子たち・上達部がかぐや姫に

エ　かぐや姫が皇子たち・上達部に　　オ　石作の皇子がかぐや姫に

①［　　］　②［　　］　③［　　］　④［　　］

問二　二重傍線部aは、どのような「心地」か。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

出典

「竹取物語」

平安時代の前期、十世紀初頃の成立。作者は未詳。最古の物語文学で「源氏物語」の中では、「物語の出で来はじめの祖」と紹介される。

重要古語

◇とまれかくまれ＝とにかく。

◇あたりよりだにな歩きそ＝近所を歩くことさえしないでいただきたい。

◇いかでか取るべき＝どうして手に入れることができようか、いや、できはしないだろう。

◇海山の道に心をつくしはてないしのはちの涙ながれき＝はるかな海や山の道中で苦労のあるかぎりを尽くしきって、御石の鉢の「ち」という言葉のように、血の涙が流れました

Sample

ア　かぐや姫を見ないうちはこの世の人間とは言えないという気持ち
イ　かぐや姫ほどの美女はまたといないだろうという気持ち
ウ　かぐや姫と会えないようでは世間体が悪いという気持ち
エ　かぐや姫と結婚できなければ生きてはいられないという気持ち

問三　二重傍線部bの歌の説明として、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　掛詞や縁語などを巧みに駆使しつつ、かぐや姫に対する思いの深さをうたっている。
イ　掛詞や縁語などを巧みに駆使しつつ、遠い天竺への旅の苦しさをうたっている。
ウ　掛詞をふんだんに用いて物の名を詠み込みつつ、遠い天竺への旅の苦しさをうたっている。
エ　掛詞をふんだんに用いて物の名を詠み込みつつ、かぐや姫に対する思いの深さをうたっている。

問四　二重傍線部cの歌に見られる「置く露」「小倉の山」とは、いったい何を意味するのか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　「置く露」とは石作の皇子が流した涙のことで、「小倉の山」とは天竺ではなく日本の山のこと
イ　「置く露」とは石作の皇子が流した涙のことで、「小倉の山」とは鉢の出どころである光のない山のこと
ウ　「置く露」とは光の少ないことを意味し、「小倉の山」とは天竺ではなく日本の山のこと
エ　「置く露」とは光の少ないことを意味し、「小倉の山」とは鉢の出どころである光のない山のこと

問五　二重傍線部dの歌の説明として、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　長い旅の途中、「白山」という山を越えた時に鉢の光が失せたのだと苦しい言い訳をしつつ、偽物の鉢は捨てるから求婚に応じてほしいと頼み込んでいる。
イ　長い旅の途中、「白山」という山を越えた時に鉢の光が失せたのだと苦しい言い訳をしつつ、さらに恥を捨ててかぐや姫が求婚に応じてくれることを期待している。
ウ　本当は光る鉢なのだが、かぐや姫の美しさに負けて光が失せたのだと強弁しつつ、さらに恥を捨てかぐや姫が求婚に応じてくれることを期待している。
エ　本当は光る鉢なのだが、かぐや姫の美しさに負けて光が失せたのだと強弁しつつ、偽物の鉢は捨てるから求婚に応じてほしいと頼み込んでいる。

問六　空欄□に入るものとして、最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　はぢをすつ　イ　露を置く　ウ　小倉の山　エ　石作の皇子

ヒント

問一　敬語の種類と人物の主客の把握が重要。
問二　「見る」と「あり」の基本動詞をしっかりつかむ。
問三　掛詞はあるが、縁語はどうかを検討する。
問四　歌で見立てられたものの意味を考える。
問五　「はちを捨て」は掛詞。動詞の「頼む」にも注目。
問六　皇子がかぐや姫にしつこく言い寄る姿をいう。

Sample

1 次の文章を読んで、後の設問に答えよ。

いまはむかし、男二人して女一人をよばひけり。先だちてよりいひける男は、官まさりて、その時の帝に近う仕うまつり、のちよりいひける男は、その同じ帝の母后の御あなすゑにて、官は劣りけり。されど、いかが思ひけむ①、のちの人にぞつきにける。かかれば、このはじめの男は、このもたりける男をぞ、いみじくあたみて②、よろづのたいだいしきことを、もののをりごとに、帝のなめし③と思すばかりのことをつくりいだしつつ、聞こえそこなひけるあひだに、この男は宮仕へをば苦しきことにして、ただ逍遥をのみして、衛府司にて、宮仕へも仕うまつらず④といふことといできて、官とらせ⑤たまへば、世の中も思ひ憂じて、憂き世には交じらはで、ひたみちに行ひ⑥につきて、野にも山にも交じり⑦なむと思ひつれど、一寸をだにも放たず、父母のいみじくかなしくしたまふ人なれば、憂きもこれ⑧にぞ思ひさはり⑨ぬる。時しもあれ、秋のころにさへありければ、いともの心細うおぼえて、心一つをなぐさめわぶる夕暮にかくいふ。

憂き世には門鎖せりとも見えなくになぞもわが身のいでがてにする

といひつつ、ながめゐたるあひだに、なまいどみてものなどいふ人のもとより、蔦のいみじくもみぢたる葉に、「これはなにとか見る⑩」とて、おこせたりければ、かくいひやる。

〔X〕憂き名のみ龍田の川のもみぢ葉はもの思ふ秋の袖にぞありける

返しもせず⑪。

問一 傍線部②・③・⑨の意味として最も適切なものを、次のア～エの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

②「あたみて」　ア 敵視して　イ うらやんで　ウ 喜んで　エ 嫌って

③「なめし」　ア 煩わしい　イ もっともだ　ウ 愚かだ　エ 無礼だ

⑨「さはりぬる」　ア 慰められた　イ 耐えられた　ウ 妨げられた　エ 忘れられた

②〔　　〕　③〔　　〕　⑨〔　　〕

問二 傍線部①・④・⑤の主語として最も適切なものを、次のア～オの中からそれぞれ一つずつ選び、記号で答えよ。

ア はじめの男　イ 求婚された女　ウ あとの男　エ 帝　オ 父母

①〔　　〕　④〔　　〕　⑤〔　　〕

出典

「平中物語」

平安時代の十世紀半ば頃の成立。作者は不祥。色好みで有名な平貞文（＝平中）を主人公とした歌物語、全三十九段で主に男と女の話。

重要古語

◇よばひけり＝求婚した。

◇御あなすゑ＝お血筋。

◇よろづのたいだいしきこと＝あらゆる不都合なこと。

◇憂き世には門鎖せりとも見えなくになぞもわが身のいでがてにする＝このいやなことの多い世の中には、別に門があって閉ざされているとも思われないのに、どうして私はこの世の外に出て行けないのだろうか

sample

問三　傍線部⑩「これはなにとか見る」とあるが、女はどのような気持ちを伝えたかったのか。最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　季節の移ろいの何と早いことでしょう。
イ　この蔦の葉は世の憂さを嘆いた血の涙で染まったのですよ。
ウ　ふさぎ込まないで紅葉を見に行きませんか。
エ　この葉の色のようにあなたの心も変わったのですか。

（　　）

問四　傍線部⑪「返しもせず」とあるが、その理由として最も適切なものを次のア～エの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　自分の心中をずばりと言いあてられたから
イ　恋の歌を期待していたのに裏切られたから
ウ　男が遠い龍田川にいることがわかったから
エ　女は秋の物思いに沈んでいたから

（　　）

問五　この「平中物語」と同じ系列に属する作品として最も適切なものを、次のア～オの中から一つ選び、記号で答えよ。

ア　竹取物語　イ　大和物語　ウ　落窪物語　エ　源氏物語　オ　堤中納言物語

（　　）

問六　傍線部⑦を例にならって文法的に説明せよ。

（例　思ひつれど　ア 完了 の助動詞「イ つ」の ウ 已然形）

ア（　　）　イ（　　）　ウ（　　）

問七　傍線部⑥「行ひ」とは具体的には何をすることか。五字以内の漢字で記せ。

（　　）

問八　傍線部⑧「これ」は何を指すか。七字以内で記せ。

（　　）

問九　〔X〕の和歌に使われている修辞法について、次のA～Cに適切な語を記せ。

龍田には動詞の A が掛けられ、同時に B が詠みこまれている。後者の修辞法は物名（もののな）と言う。例えば「来べきほどときすぎぬれや待ちわびて鳴くなる声の人をとよむる」という歌の場合は、C という鳥名が詠みこまれているのである。

A（　　）　B（　　）　C（　　）

ヒント

問一　②「あたむ」は「仇む」、⑨「さはる」は「障る」と書く。
問二　敬語のチェックと文脈で考える。
問三　「これ」がさす「もみぢたる葉」は何をあらわしているかを考える。
問四　女の行為。
問五　ジャンルの歌物語は、この作品以外に「伊勢物語」とあともうひとつは何か。
問六　直前との接続から答えの根拠を考える。
問七　古典常識語。単語の知識として覚えておきたい。
問八　直前の記述に注目。
問九　物名は「たつたがわ」と平仮名にして歌の前にある語を探してみる。

Sample

2 次の文章は、宮中で貴公子・女房たちが中宮の前で自分の体験談を披露するところである。よく読んで、後の設問に答えよ。

中将の君、「この御火取のついでに、あはれと思ひて人の語りしことこそ、①思ひ出でられはべれ」とのたまへば、おとなだつ宰相の君、「何事にか侍らむ。つれづれに思し召されてはべるに、申させたまへ」と②そそのかせば、「さらば、ついたまはむとすや」とて、「ある君達に、忍びて通ふ人やありけむ。③いとうつくしき児さへ出で来にければ、あはれとは思ひきこえながら、きびしき片つ方やありけむ、絶え間がちにてあるほどに、思ひも忘れず、いみじう慕ふがうつくしう、時々は、④あるところに渡しなどするをも、『いま』なども言はでありしを、ほどへて立ち寄りたりしかば、いとさびしげにて、めづらしくや思ひけむ、かき撫でつつ見ゐたりしを、え立ちとまらぬことありて出づるを、⑤ならひにければ、例のいたう慕ふがあはれにおぼえて、しばし立ちとまりて、⑥『さらば、いざよ』とて、かき抱きて出でけるを、いと心苦しげに見送りて、前なる火取を手まさぐりにして、

こだにかくあくがれ出でば薫物のひとりやいとど思ひこがれむ

と忍びやかに言ふを、屏風の後にて聞きて、いみじうあはれにおぼえければ、児もかへして、そのままになむ居られにし」と。

（注）○ついたまはむとすや＝私の後を続けてお話しになりますよね。
○『いま』なども言はでありし＝子供が「もうお母さんのところへ帰る」などとだだをこねたりしないでいた。
○こだにかく＝「こ」には「籠」がかけられている。籠は薫物の火取り香炉にかぶせるかご。

出典

「堤中納言物語」
平安時代後期の成立。作者は未詳。短編集の作り物語。その中の一つ、「このついで」は三人が連想によって語り継ぐ歌物語めいた三つの話からなる。

重要古語

◇おとなだつ＝年長の。
◇きびしき片つ方＝うるさい本妻。
◇え立ちとまらぬことありて出づるを＝留まることのできない用事があって出て行くのを。
◇そのままになむ居られにし＝そのまま（その夜は姫君のもとに）いらっしゃった。

Sample

問一　傍線部①を品詞に分解し、それぞれ文法的に説明せよ。

問二　傍線部②は、誰が誰に何をするようにそそのかしたのか、説明せよ。

問三　傍線部③・⑤を口語訳せよ（必要に応じて言葉を補って訳すこと）。

③

⑤

問四　傍線部④の「あるところ」とはどこか、具体的に説明せよ。

問五　傍線部⑥は、誰が誰に対してどうしようと思って呼びかけたのか、説明せよ。

問六　文章中の和歌を口語訳せよ。また、この和歌に用いられている修辞法について説明せよ。

口語訳

修辞法

問七　「このついで」は「堤中納言物語」におさめられた短編物語のひとつである。「堤中納言物語」の中におさめられた他の編の題名をひとつ書け。

ヒント

問一　「思ひ出で」・「られ」・「はべれ」と単語は分かれる。

問二　「そそのかす」はせき立てるの意味。

問三　基本単語をきっちり訳す。

問四　「ある」はラ変動詞で、住んでいるの意味。

問五　「いざよ」は呼びかけの意味。

問六　掛詞と縁語が用いられている。

問七　全部で十の作品がある。

Sample